

成人看護学実習Ⅱ評価表

実習場所	病棟	実習期間	年	月	日
評価内容	評価基準	自己 評価	教員 評価		
1.成人期にある対象者の理解	☐ 対象者の発達段階の特徴を学習し、家庭環境や役割等の生活背景について必要な情報を収集し、入院による影響を述べることができる。				
	☐ 対象者の疾患について学習し、それらが対象者の生活にどのように影響しているか、退院後はどのように影響するかを述べることができる。				
	☐ 疾病や入院による対象者や家族の心理状況を考え、コミュニケーションが取れている。				
2.対象者の看護上の課題の把握	☐ 疾病の基礎知識と看護について学習し、他者に説明ができるレベルに理解している。				
	☐ 対象者・家族、カルテ、他職種など多方面から看護に必要な情報を収集し、記載することができる。				
	☐ 情報が何を意味しているか考え、アセスメントを記載することができる。また、アセスメントから全体像を導き、把握できる。全体像は他者から見て患者を把握しやすいものになっている。				
	☐ 全体像から看護上の課題を導き出せる。また対象者の意向を踏まえマズローのニード階層を活用し根拠をもって優先順位を決定できる。				
3.個別性のある看護過程の展開	☐ 問題点の根拠と看護目標、期待される結果につながりがある。				
	☐ 対象者の安全・安楽と個別性を考慮した計画が、5W1Hで立案されている。				
	☐ 実施した援助に対しての対象者の反応を記載し、その反応に至った根拠をアセスメントできている。				
	☐ 評価に基づき、看護計画の追加・修正が記載できる。				
4.対象者の価値観を尊重し、専門職業人としての共感的態度および倫理に基づいた看護実践	☐ 対象者の反応をあらかじめ予測し、具体策が複数あり安全・安楽に看護援助を行うことができる。				
	☐ 対象者への言葉遣いが優しく丁寧である。 対象者の気持ちを考え、思いの表出を促す声掛けと傾聴ができる				

5.健康・障害レベルに応じた看護実践	別紙		
6.学生らしい態度で実習に取り組む	☐ 援助実施前後に報告できる。実施後の報告は内容を精選し、アセスメントをしながら報告ができる。		
	☐ グループメンバーと話し合い、協力することができる。 カンファレンスでは自分の意見をアサーティブに述べ、他者の意見を活用し計画に反映させることができる。		
	☐ 事前学習、追加学習、実習記録を決められた形式で期限内に提出できる。		

評価方法

1項目5点

5点：できた 4点：助言によりできた

3点：何度も助言を受けできた

1～2点：何度も助言を受けたが一部しかできなかった

0点：全くできなかった

備考	遅刻	早退	欠課	評価合計 点数	

別紙

急性期

評価内容	評価基準	自己 評価	教員 評価
5.健康・障害レベルに応じた看護実践	☐ 手術を受ける対象者の身体的な準備について述べられ、その観察を行い、合併症のリスクを減らすためのケアができる。また精神的側面についても関心を寄せ、不安を軽減する関わりができる。		
	☐ 手術侵襲と生体反応を理解し異常の早期発見のための観察ができる。		
	☐ 術後の回復過程と早期離床の意義を対象者に説明でき、離床に向けた援助ができる。		
	☐ 対象の苦痛を他者がわかる方法で測定し、苦痛の程度に合わせた内容のケアを実践できる。		
	☐ 対象の退院後の生活を踏まえ、対象が知りたい情報が入った退院指導を考え実践できる。		

回復期

評価内容	評価基準	自己 評価	教員 評価
5.健康・障害レベルに応じた看護実践	☐ 回復を促進するための援助について学習し、患者の生活に自然に取り入れ援助ができる。		
	☐ 対象者の身体機能を把握し、回復過程に応じた日常生活動作への援助と退院後の生活を考慮した日常生活動作拡大への援助ができる。		
	☐ 対象者の苦痛の原因について考え、その原因に応じた苦痛軽減のための援助ができる。		
	☐ 社会資源について学習し対象者に必要な社会資源を考えることができる。		
	☐ 障害受容過程を理解し、その段階に応じた関わりができる。		

慢性期

評価内容	評価基準	自己 評価	教員 評価
5.健康・障害レベルに応じた看護実践	☐ 慢性病患者の理解につながる考え方(患者が抱く無力感や病みの軌跡)について学習をし、それらを活用し情報収集とアセスメントができています。		
	☐ 対象者の自己効力感を高めるための計画を立案し行うことができる。		
	☐ 対象者の主体性を尊重した関わりができる。		
	☐ 対象者を生活者としてとらえ、セルフケア行動の獲得と退院に向けた援助を考え、実践することができる。		

終末期

評価内容	評価基準	自己 評価	教員 評価
5.健康・障害レベルに応じた看護実践	☐ 全人的苦痛について学習しており、対象者の苦痛を全人的な視点でとらえることができる。		
	☐ 終末期にある対象者の症状の変化を観察できる。また予後予測を活用し今後起こりうる症状についても考えることができる。		
	☐ 緩和ケアについて学習し、対象者の苦痛を最小限にし閾値をあげるための援助が実践できる。		
	☐ 終末期の対象者にとっての QOL を倫理的視点を踏まえて考え、述べることができる。		
	☐ グリーフケアを意識し家族と関わるすることができる。		

評価方法

急性期、回復期、終末期 1 項目 4 点

4 点：できた 3 点：助言によりできた 2 点：何度も助言を受けできた

1 点：何度も助言を受けたが一部しかできなかった 0 点：全くできなかった

慢性期 1 項目 5 点

5 点：できた 4 点：助言によりできた 3 点：何度も助言を受けできた

1～2 点：何度も助言を受けたが一部しかできなかった

0 点：全くできなかった